

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：32677

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K17239

研究課題名（和文）香港のフードアクティヴィズムと民主化運動

研究課題名（英文）Food activism and democratization movements in Hong Kong

研究代表者

安藤 丈将（Ando, Takemasa）

武蔵大学・社会学部・教授

研究者番号：50434220

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、菜園村生活館という農場のフィールド調査を通して、香港における食べ物の生産、流通、消費を通しての社会変革（フードアクティヴィズム）の実践を明らかにしている。具体的な考察の対象は、運動の歴史、文化、ネットワークである。

文書資料、インタビュー、参与観察に基づきながら、私は、運動が返還後の民主化運動の一環であり、香港の主流の方針である開発主義に対する批判を表現する哲学と実践であり、持続可能な暮らしを志向する実践者たち（農民、消費者、支援者）の広がりを見出し、それを基盤にしていることを論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、第一に、香港の民主化運動の背景を明らかにしていることである。雨傘運動や逃亡犯条例反対運動に示される路上の抗議行動が、農のような日常的な実践に支えられていることを示した。路上の行動を中心に分析されてきた民主化運動の文化的な側面に光を当てている。

第二に、「社会運動としての農」の理解枠組みを提示したことである。食べ物をつくるという日常的でありふれた営みに社会を変革するというと奇妙に感じるかもしれないが、「社会運動としての農」の実践は、今日、グローバルに広がっている。本研究は、その実践の可能性とそれが成立する条件を考察している。

研究成果の概要（英文）： By conducting an in-depth field research on Sangwoodgoon farm, this project explores the history, culture, and networks of food activism in Hong Kong, which is practices of social change by transforming the production, distribution, and consumption of food.

Relying on data from documents, interviews, and participation research, I argue that food activism is a part of democratization movements in post-handover Hong Kong, is an everyday practice of countering the mainstream ideology of developmentalism, and is based on connections of farmers, consumers, and their supporters who are committed to building sustainable lifestyle.

研究分野：政治社会学、社会運動史

キーワード：社会運動 民主主義 香港 食 農

## 1. 研究開始当初の背景

北東アジアは、新たな民主化運動の波を経験している。日本の脱原発運動や安保法制に対する抗議運動、台湾の「ひまわり学生運動」、香港の「雨傘運動」に見られるように、長く政治的な安定を誇ってきたこれらの国や地域で、議会や官僚制に対する不信が高まっている。それと同時に、民主化運動への社会的な関心は高く、その背景を解明することに対する期待が寄せられている。

代表者は研究開始以前、日本を中心とする北東アジアの「フードアクティヴィズム」の研究をしてきた。それは、フードアクティヴィズムとは、有機農業や自然農を実践したり、その生産者を支えたり、フォーマーズマーケットを組織運営したりする人びとのネットワークである。北東アジアでは長く開発主義が支配的な言説であり、人びとの暮らしを支える根幹である食やそれをつくる営みである農よりも、国家的な経済成長が優先されてきた。代表者は、フードアクティヴィストたちが、開発主義に対する批判を、政策や法律の変更ではなく、食と農を軸にした生活と社会の原理の組み換えを通して実践していることを示してきた。

こうした研究を進める中で、代表者は、フードアクティヴィズムが民主化運動と結びつき、その原動力になっているという知見を得た。民主化運動における路上の動員の裏で、食、福祉、教育、環境、人権などの 이슈に関わるグループが生活に身近な場で民主化の実践をしていることは、それほど知られていない。これらのグループは、日常的に社会変革を実践する場を市民に提供しながら、運動の文化（価値意識とその実践の様式）を創出している。

私は、この結びつきがもっとも明確に見られるのが、香港であると考えている。香港には、植民地主義や開発主義といった現代の北東アジアに広がる諸問題が集約的に表われており、それゆえに、生活と社会の異なる原理を模索する運動が広がっている。本研究では、香港のフードアクティヴィズムの調査を通して、民主化運動の背景を明らかにすることを目指す。以上が研究開始当初の背景である。

## 2. 研究の目的

本研究では、香港のフードアクティヴィズムの調査を行ってきた。研究のフィールドになるのは、新界地区の元朗にある「菜園村生活館」である。この農場は、高速鉄道の建設という大規模開発の計画に抵抗した歴史を持ち、その後、農薬や化学肥料を使わない循環型農業を協同で実践し、非農家出身の青年を多く集めてきた。この農場の調査を通じて、フードアクティヴィズムの歴史・文化・ネットワークを明らかにするのが、研究の目的である。

まず、農場の実践を香港の開発主義と植民地主義、さらには民主化運動の歴史の中に位置づけてきた。返還後の民主化運動は、2003年の国家安全条例の制定に対する反対運動を機に参加を拡大していく。私はその中でも農場の二つの大規模抗議イベントに注目した。一つ目は、2005年に香港で開かれたWTOに対する抗議行動である。これは、12月のWTO閣僚会議の開催に合わせて、アジアを中心とする社会運動（グローバル・ジャスティス運動）のネットワークが組織、参加した行動である。

二つ目は、2009～10年の菜園村の高速鉄道反対運動である。中国大陸の深圳から香港に至る高速鉄道の路線建設計画が持ち上がった際に、立ち退きを迫られる菜園村の住民が抗議をし、その後フードアクティヴィズムを担っていく青年たちがこの抗議を支援した。これらの抗議イベントは、アクティヴィストの間に抵抗の思想と実践をめぐるイメージと議論を喚起し、その後の展開につながっている。私は、二つのイベントが食や農を通じた生活や社会の組み換えという考え方の形成を導いた過程を調査する。

単に運動史をひも解くだけでなく、民主化運動の社会的な背景も考察している。特に1997年以降、香港は中国を中心とする地域の政治経済秩序に組み込まれ、中国大陸の資本や観光客との接触の機会が急増した。それと同時に香港の開発が進行し、人びとの生活環境や自然環境が激変している。代表者は、開発の政策的な側面だけでなく、それが人びとの日常に及ぼす影響に注目しながら、脱開発主義と脱植民地主義の願望が民主化運動、さらにはフードアクティヴィズムに接続していった。

加えて、私は、「本土主義」と呼ばれる香港ナショナリズムの広がりの中に農場の実践を位置づける。路上での「反大陸デモ」に象徴されるように、排外主義的な感情が高まっている状況を踏まえ、フードアクティヴィズムとナショナリズムとの関係を検討する。

最後に、食と農を軸にした生活や社会の組み換えという理念を共有する人びとのつながりを明らかにする。一つ目は、香港内の農民のネットワークである。香港では農というのはマイナーな職業だが、その中で農民同士がどうつながり、いかなる関係性を構築しているのかを見ていく。二つ目は、農民と顧客（消費者）のネットワークである。顧客はなぜ農民から農産物を購入し、いかにして彼らを支援しているのか。農場をめぐる提携関係の現実を明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究は、香港のフードアクティヴィズムを考察する。研究の方法として、菜園村生活館という農場に関する文書資料やアクティヴィスト所蔵資料の収集と分析、インタビューの実施、参与観察を行ってきた。

#### (1) 図書館所蔵の文書資料

基本資料になるのは、パンフレットのような書籍になっている運動の出版物であり、香港の書店や図書館で入手可能なものも少なくない。運動について報じた新聞や雑誌記事も同様である。

#### (2) 個人所蔵の文書・映像資料

アクティヴィスト個人が所蔵している資料も貴重なデータ源である。チラシ、ビラ、ニュースなどの文書資料のように、図書館に所蔵されていない刊行物が数多く存在する。代表者はこれらの資料を保存しているアクティヴィストたちから資料を借用し、複写・分析を行なうことで、実証データに厚みを持たせてきた。反高鉄運動に関しては関係者に多数のチラシやビラを電子データで提供を受けた。農場に関しても同じだが、とりわけ映像資料として作品化されたものが残っていて、その提供を受けている。これは、生活館創設初期の状況と雰囲気を知るのに大変有効であり、実証の厚みを持たせることにつながっている。

#### (3) インタビュー

インタビューから得られる情報は、本研究の中心的な資料となる。特に菜園村生活館の中心的なアクティヴィストには全員取材することができた。彼らは非農家出身の20~30代であり、高速鉄道反対運動を経由する場合もあれば、そうでない場合もあるが、それぞれの事情で農場の活動に関わった。単にアクティヴィスト各自の経験を聞くだけでなく、そこに植民地主義や開発主義といった香港の状況を重ね合わせて、個人史と政治社会史との交錯を描くことにつながった。

また、農場を支えるボランティアや顧客にも広く話を聞くことに成功した。農場の中心的メンバーの声だけでなく、周辺のな人びとの声も組み込むことで、菜園村生活館という農場の実践を多角的に見ることができる。

#### (4) 参与観察

実際にアクティヴィストたちと時間を共にする中で得られる知見も重要なデータになる。慣行農法と一線を画し、ただ物売るだけでなく買い手と信頼関係を築くといった彼らの日常的な実践は、一定期間、継続的に観察しなくては十分に理解することができないからである。私は2017年度が研究年度であったため、この時期に集中的に滞在した。農場における病害虫や自然災害との向き合い方、農産物の買い手との信頼関係の築き方といった彼らの日常的な営みを観察して理解を深めてきた。ただ、それ以外の時期は勤務先の通常業務があるため、ほとんど参与観察といえるようなものをする時間が取れなかった。

### 4. 研究成果

以下では、本研究の成果を歴史、文化、ネットワークの三点から整理する。

#### (1) 歴史

まず、歴史である。香港のフードアクティヴィズムは、返還後の民主化運動の過程で生まれた。菜園村生活館という農場も、2010年代に突然生まれたわけではない。私は、その前史として重要な二つのイベントを見ている。一つ目は、反WTO運動の影響である。2005年の抗議行動は、すでに2003年の国家安全条例の反対行動で芽生え出していた民主化運動がトランスナショナルな運動と接し、新しい運動の展開を生み出すきっかけになった。1999年のWTOシアトル会議以降広がっていった抗議の波、すなわち、「シアトル・サイクル」は、主に欧米におけるグローバル・ジャスティス運動の展開の中で論じられてきた。だが、それだけでなく、香港のようなアジア地域にも波及をもたらしたことを考察した。

二つ目は、2009-10年の反高鉄運動の影響である。このイベントで重要なのは、高速鉄道が開発主義を象徴していたため、反高鉄運動が市民社会の言説に開発に対する疑問を広めたことである。香港においては長らく市場主義的(=市民生活の軽視)で行政主導的(=市民参加の軽視)な政府運営が主流であり続けてきた。そのことを考えると、開発に対する批判的な見方の登場は、香港史(及び開発主義を追求してきた北東アジアの歴史)における資本主義的な成長の時代の終わりを示していた。

開発に対する疑問がポスト開発の願望を生み出す中で発見されたのが、農である。アクティヴィストは、菜園村民との交流を通して、ポスト開発の暮らし方として農を位置づけた。彼らは、自分のライフコースの中で学歴をつけてグローバル企業で働いたり起業したりする競争的な生き方に疑問を持っている点で共通している。農は、無意味で有害でさえある「ブルシットな仕事」(デヴィッド・グレーバー)からの解放の方法であった。

もう少し香港の社会的な背景に引き付けていえば、農に対する支持の背景には、2000年

代における開発の急速な進展という状況がある。SARS 危機からの回復を目指す中で、香港政府は中国大陸の資本や観光客を招く政策に舵を取った。その結果として、香港各地で土地が商業地や宅地に変貌し、物価が高騰した。経済指標は改善したものの、それは人びとの暮らしを犠牲にしてなされたという不満が広まった。「社会運動としての農」の出現の背景には、近年の資本主義的な経済の拡大を追求する開発政策の再起動があったという点を確認しておこう。

農が非暴力的な抵抗の手段としても支持を受けた点も重要である。その後にオキュパイ・セントラル（中環）や雨傘運動に続いていく、非暴力的な抵抗は、そもそも WTO 抗議行動と反高鉄運動の中で見出されたものであった。「苦行」と呼ばれる抗議レパトリーは、アクティヴィストが非暴力を原則として問題を広く公共圏に提示する方法であった。路上の抗議の高まりが収まり、日常生活に戻った後も、非暴力を原則としながら開発に抗うことを探る中で、彼らは農という抵抗の手段に注目した。

社会運動論では「サミット・プロテスト」のような非日常的な抗議空間の出来事を「経験」と呼んでいるが、菜園村生活館の農民たちは、ポスト開発と非暴力の「経験」を日常に波及させる時に農を実践したのである。

## （2）文化

次に、文化である。返還後の民主化運動の中で、菜園村生活館に象徴される「社会運動としての農」が現れた。だが、それは困難な状況にあった。「中国化」の進展の中で、香港政府は運動の要求を軽視ないしは無視し続けている。他方、政府が観光業や金融業を支援する中で、農は産業としての基盤が成立しておらず、持続的な実践は容易ではなかった。

私は、そんな困難な状況の中、農民を政治的に主体化させることを可能にしたものとして、「永續農業（パーマカルチャー、以下 PC）」に注目した。それは、自然の力を借りながら、人間が持続的に生存するための実践哲学を指す。持続的な生存の方法として農が位置づけられるがゆえに、PC は農を基盤にした暮らしを目指す。

PC は、厳しい自然環境に直面し、無力感に苛まれがちな農民に有能感を獲得させる役割を果たしている。彼らは、自然環境のみならず、人間がつくり出した農と社会運動による拘束、さらには社会・政治制度（資本主義と植民地主義）による拘束にも取り囲まれている。PC はこれらの拘束から農民たちを解放し、彼らに経済活動の自由に還元されない根源的な自由の展望を与えている。

以上のような農民の主体化における PC の役割を指摘したうえで、私は、PC と社会運動の接続のされ方も考察している。近年の「食べ物運動」についての研究が示すように、主体化（エンパワメント）は必ず運動に結びつくわけではなく、一人ひとりの自助努力による問題解決につながる危険性もある。私は、生活館のケースに即しながら、エンパワメントと社会変革の集合的实践とを結びつけたのが、抵抗の歴史の想起、顧客、さらにはボランティアへの支援の呼びかけという三つの条件であることを示した。香港という農をめぐる環境が極端に悪いがゆえに私事化した。こうして生活館の農は、経済行為や趣味活動のように私事化されることなく、「社会運動としての農」であることを維持している。

## （3）ネットワーク

最後に、ネットワークである。PC は 1970 年代にオーストラリアで生まれたが、それは各地のエコロジー運動と交錯して展開してきた。私は、香港における PC のネットワークを明らかにしてきた。そのネットワークは、ポスト開発の問題意識を持つ人びとが 2000 年代前半より小規模ながらも PC を実践したことに始まる。その実践の蓄積をもとに、PC のネットワークは、反高鉄運動後の「農の発見」以降の「社会運動としての農」の拡大を支えた。

PC の体系は、農法だけでなく、農に対する考え方や生き方にも及んでいる。非農家出身の青年たちは、ワークショップなどで PC を学び、実践する中で、知識や技術、さらには価値観やアイデンティティを共有していった。この共有をもとに、PC の実践者たちのプールが形成されている。実践者のプールの存在は、農場の持続的な運営の条件である。

土地分配の不平等や農産物価格の安さの問題もあって、生活館ではフルタイムの農民として生計を立てることは困難である。農民たちは、自分や家族の事情のために、毎年農に関わることのできる時間とエネルギーが変化する。また、農外活動（収入を得る仕事から家事、育児までを含む）との両立も求められている。担い手が流動的な状況にあるにもかかわらず、生活館が農民の協同を持続的にしているのは、PC ネットワークのゆえである。

私は農民間の関係だけでなく、農民と顧客の関係も調査した。農民は顧客に生命の再生産の源を提供し、一方で顧客は定期的な購入を通して農民を支えている。農民と顧客は互いに関心を寄せ、配慮し、実際にニーズに応える行動を取っている。私は、両者の非市場的な関係を社会理論の中で使われる「ケア」という言葉で表現できると考えている。

協同の関係が顧客にまで広がっている背景として、雨傘運動の影響を挙げられる。雨傘運動は、香港特別行政区における普通選挙の導入という当初の要求を達成できなかったかもしれない。だが、コミュニティ形成という観点では、市民社会の底流にその遺産を確かに見取ることができる。

他方、本稿は顧客のケア行動には限界も指摘できる。顧客の支援の行動は、農民が再生産

可能な程度には届いていない。それは、顧客が農に関わる厚みのある情報を不足しているためであり、彼らが自己組織を通して学びを発展させる環境が不在のためでもある。こうした不足や不在の結果、生活館の農民は、農のリスクとコストの重い負担を引き受けることになっている。

この負担の問題は、実は世界各地の農民に共通に起きている。だが、多くの国では、政府が農民に対して何らかの援助(補助金など)をしているので、非農民が意識しなくても農民が負担を軽減する構造ができていく。開発をひたすら追求してきた香港では、政府が農業に産業としての価値を見出しておらず、そうであるがゆえに農民に対する援助がほとんどない。そのため、顧客からのサポートの不足は、農民が負担を一手に受けることにつながる。いうならば、農民は裸で農の「脆弱性」(ジェームス・スコット)にさらされている。その意味では、生活館の農民の困難は、世界各地の農民が直面している問題を集約的に示している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 安藤丈将	4. 巻 23
2. 論文標題 香港・菜園村生活館におけるパーマカルチャーと社会運動	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ソシオロジスト	6. 最初と最後の頁 47-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安藤丈将	4. 巻 104
2. 論文標題 社会運動研究と民主主義研究の再統合に向けて（特集 社会運動研究の新基軸を求めて）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会学研究（東北社会学研究会）	6. 最初と最後の頁 145-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安藤丈将	4. 巻 21
2. 論文標題 「資本主義の夢」の消えた後に 香港における広深港高速鉄道反対運動とその遺産	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ソシオロジスト	6. 最初と最後の頁 1 - 37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安藤丈将	4. 巻 1129
2. 論文標題 警察とニューレフトの「1968年」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 146 - 166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安藤丈将	4. 巻 2-38
2. 論文標題 「デモの都」香港、民主主義を求める人びと	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ハリーナ	6. 最初と最後の頁 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安藤丈将	4. 巻 2 - 39
2. 論文標題 百姓オブザワールド03 鐘 智豪さん (香港・元朗区 八郷)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ハリーナ	6. 最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 11件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 安藤丈将
2. 発表標題 社会運動における日常の政治
3. 学会等名 日本政治学会年次大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤丈将
2. 発表標題 香港を耕すー農から見えるアジアの未来
3. 学会等名 BMW技術者協会基礎セミナー (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤丈将
2. 発表標題 脱原発の運動史ーチェルノブイリ、福島、そしてこれから
3. 学会等名 宇都宮大学国際学部附属 多文化公共圏センター(CMPS)・福島原発震災に関する研究フォーラム主催公開研究会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takemasa Ando
2. 発表標題 Social movements and civil disobedience in Japan
3. 学会等名 The Inaugural Congress of East Asian Sociological Association(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤丈将
2. 発表標題 ニューレフトの遺産 市民的不服従、市民社会、民主主義
3. 学会等名 国際シンポジウム：明治維新の遺産 民主主義への道(1868年-2018年)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安藤丈将
2. 発表標題 警察とニューレフトの「一九六八年」：運動のポリシングとその遺産
3. 学会等名 グローバルな記憶空間としての東アジア Ver. 2(招待講演)
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 安藤丈将
2. 発表標題 香港における広深港高速鉄道反対運動とその遺産
3. 学会等名 武蔵社会学会年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤丈将
2. 発表標題 警察とニューレフトの「1968年」
3. 学会等名 同時代史学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Takemasa Ando
2. 発表標題 Protests and farming
3. 学会等名 The Culture and Sustainable Livelihood Cluster, KFCRD, Department of Cultural Studies, Global University for Sustainability, and Lingnan Gardeners（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安藤丈将
2. 発表標題 ポスト「一九六八年」における知の探求
3. 学会等名 日本近代文学会春季大会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 安藤丈将
2. 発表標題 『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」』第11章
3. 学会等名 冷戦研究会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 安藤丈将
2. 発表標題 松下圭一「地域民主主義」論の活かし方
3. 学会等名 日本政治学会年次大会（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 田村 哲樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 278
3. 書名 日常生活と政治（分担執筆，範囲：第2章 社会運動における日常の政治，33-59頁）	

1. 著者名 安藤 丈将	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 352
3. 書名 脱原発の運動史	

1. 著者名 安藤 丈将、川端 浩平、轡田 竜蔵	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 197
3. 書名 サイレント・マジョリティとは誰か : フィールドから学ぶ地域社会学	

1. 著者名 小規模家族農業ネットワークジャパン	4. 発行年 2019年
2. 出版社 農山漁村文化協会	5. 総ページ数 114
3. 書名 よくわかる国連「家族農業の10年」と「小農の権利宣言」	

1. 著者名 安藤丈将	4. 発行年 2018年
2. 出版社 左岸文化	5. 総ページ数 4
3. 書名 「致台湾讀者」『新左運動與公民社會』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------